

マルバ実践報告フォーラム 2019 小田原市文化セミナー特別編 2019.7.20 小田原市民会館小ホール

(公財) かながわ国際交流財団 野呂田 純一

7月20日(土)、「マルバ実践報告フォーラム 2019・小田原市文化セミナー特別編」と題したイベントが小田原市民会館にて開催された。マルバの美術館である神奈川県立近代美術館と茅ヶ崎市美術館、そして、マルバと類似の目的を掲げつつ異なる手法で実践しているアーツ前橋やNPO 法人スローレーベル、それら4つの美術館・団体の実践報告をメインプログラムとするフォーラムである。

マルバを構成する美術館は神奈川県湘南エリアの中央から東側に位置しており、今回のフォーラムは小田原市文化政策課の協力を得て、県西部の方々ともマルバの理念や実践内容について意見を交換する場となった。

会場には定住外国人や障がいのある人たちの美術館へのアクセス向上や、美術館でのインクルーシブな教育普及事業に興味・関心を持つ学芸員・研究者・留学生らが多数来場した。マルバ実行委員等の主催者側も含めると100名近い参加者となった。

プログラムとしては主催者挨拶、開催趣旨、マルバ・ワークショップの概要説明に続いて、実践報告とそれを踏まえたパネルディスカッションや、参加者同士の情報交換会が行われた。

実践報告について順にテーマ(カッコ内は報告者)を挙げると、『インクルーシブデザイン手法を活用したフィールドワークから表現へ』(茅ヶ崎市美術館学芸員の藤川悠さん)、『外国につながる子ども・若者たちへのエンパワーメント—美術館とアートの力』(神奈川県立近代美術館学芸員の鈴木敬子さんと筆者)、『生きることに寄り添う表現とは何か—

“表現の森”の活動から』(アーツ前橋学芸員の今井朋さん)、『共創のための「人」と「環境」をつくる—スローレーベルの舞台芸術の取り組みから』(NPO 法人スローレーベルの野崎美樹さん)の4つである。

今回の実践報告の発表時間は15分から20分と短いものであったため、それぞれワークショップ(プロジェクト)概要と実践から得られた重要な知見に的を絞った報告となった。



会場の様子

茅ヶ崎市美術館では美術館まで(から)つづく道を「感覚特性者」(聴覚障がい者、小さな子とベビーカーユーザー、視覚障がい者と盲導犬、車椅子ユーザー)と表現者(アーティスト・研究者)がペアになって、一緒に歩き回るフィールドワークを4回実施した。インクルーシブデザインの手法で、表現者が感覚特性者の感情や行動から気づきを得て作品を制作し、企画展「美術館まで(から)つづく道」での展示に至る経緯を藤川さんは報告した。藤川さん自身がフィールドワークを通じて、感覚特性者だけでなく、表現者もワークショップに同行したコアメンバーも、一人ひとり感覚が違うこと、すなわち、「みんなが感覚特性者」であることに気づいたという。



実践報告 I 藤川悠さん

鈴木敬子さんは、神奈川県立近代美術館でのブルーノ・ムナリー(イタリアの芸術家・絵本作家)の日本最大の回顧展に合わせて開催された鑑賞・造形ワークショップの概要とそのアンケート結果について報告した。参加者である中華学校や朝鮮学校の児童・生徒・保護者に対する、館長や学芸員のウエルカムな態度が、参加者がこれまで来たことのない美術館という場での自由に表現していいという安心感や、大人への信頼感につながったと鈴木さんは振り返った。

筆者は本年3月に県内の外国人集住地区に住む子ども・若者たちのエンパワーメントを目的として開催された美術館での撮影会「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」について、その概要と効果的だったと考えられるしなげについて報告した。報告の中で撮影会参加者の一人であるチャン・バン・ティエップさん(ベトナムから来日、アルバイトをしながら日本語を学んでいる)は、撮影会への参加により「写真」への興味が増し、深く考えて撮影するようになったとコメントしてくれた。

アーツ前橋の今井さんは自身で企画した2016年の企画展「表現の森」について、そして企画展以後現在まで続く5つのアートプロジェクトの内、アーティスト滝沢達史さんとアリスの広場(フリースペース)によるアートプロジェクトについて報告した。

今井さんによれば、企画展ではアリスの広場のボランティア Y さんの引きこもり経験を元に、滝沢さんが Y さんと協働で制作したインスタレーションが展示され、その制作過程で Y さんは心に閉じ込めていた自分の過去の思いと対峙



実践報告 II 鈴木敬子さん



実践報告 II 筆者とチャン・バン・ティエップさん



パネルディスカッション

できたという。そうした引きこもりの子ども・若者たちとの協働経験から、滝沢さんが表現の森特設サイトに執筆した「世界の見え方は案外心の変化に左右される。だから、生きづらさを抱える人には、社会に合わせる努力よりも世界の広がりを獲得した方が良い」という考え方は、前述の撮影会に参加した子ども・若者たちにも当てはまる。引きこもりの子ども・若者たちという「美術館から最も遠い」と思われる人たちに対して、美術館ができることは予想以上にいろいろあることを実感できた報告だった。

杉浦幸子さん(武蔵野美術大学教授)がモデレーターを務めたパネルディスカッションは、マルバ実行委員の平井宏典さん(相模湾・三浦半島アートリンク幹事)の各報告者への質問から始まった。企画展「表現の森」について来場者の反応がどのようなものだったかという質問に対して、具体的な言及を避けながらも、「誰しもがマイノリティ性を持っているはずなのではないか」という問いを投げかけ来場者を議論のプラットフォームに入り込めるよう企画展を設計したとの今井さんの回答からは、従来の「鑑賞」という企画展の枠を飛び越える斬新さを感じた。また、この問いが藤川さんのフィー



実践報告 III 今井朋さん



モデレーター 杉浦幸子さん



実践報告 IV 野崎美樹さん



パネリスト 平井宏典さん

の撮影会での作品19点が展示された。フォーラムの開催とともに、これらの作品を多くの方々に観覧いただけたことは担当者として感慨深いものがあった。

この場を借りてフォーラム開催にあたり尽力していただいた方々に謝意を述べたい。

※主に障害者について、感覚に焦点をあててその人の「特性」として呼ぶ造語

■マルバ (MULPA) とは

Museum UnLearning Program for All/ みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—の略称。(公財) かながわ国際交流財団が神奈川県内にある4つの公立美術館(神奈川県立近代美術館・茅ヶ崎市美術館・平塚市美術館・横須賀美術館)等呼びかけ、定住外国人や障がいのある方々等を含む「すべての地域住民」の美術館へのアクセス向上やインクルーシブな教育普及事業の企画・実践を目的として、2016年度から始まったプラットフォーム型アートプロジェクト。

●特設サイト URL

<http://www.kifjo.org/mulpa/>



外国につながる子ども・若者たちの写真展

なお、会場では「外国につながる子ども・若者たちの写真展」と題して、前述